THE KYOTO UNIVERSITY MUSEUM

August 2021

Newsletter No. 52

京都大学総合博物館
ニュースレター

企画展「医師になる！　京都大学の医学教育」（2頁に関連記事）

2021年度企画展「医師になる！ 京都大学の医学教育」..... 2
新任スタッフの紹介..... 4
総合博物館長の再任..... 5
総合博物館コレクション研究〈12〉　水野清一寄贈綏遠（すいえん）・包頭（ほうとう）購入青銅器について 6
研究資源アーカイブ通信〈22〉　アーカイブズと私（3）：髙井たかね先生に聞く
「田中淡建築庭園写真，1970–2003」..... 8
特別展「文化財発掘 VII」オンライン講演会 10
レクチャーシリーズ再開..... 11
大学博物館等協議会・日本博物科学会 11
総合博物館日誌（2021年3月～6月）..... 12

2021 年度 企画展

医師になる！ 京都大学の医学教育

開催期間：2021 年 7 月 21 日（水）～ 10 月 10 日（日）

医学生はどんなことを医学部で学び医師になっていくのでしょうか？今回の企画展では，京都大学医学部医学科の医学教育を，過去及び現在において使われてきた医学教材の展示を通して紹介します。

展示は 4 章とエピローグで構成されており，大きく分けて，前半は過去の医学教育，後半は現在の医学教育に関する展示となっています。この展示を通して，過去と現在の京都大学の医学教育を比較していただくことで，これまでの医学教育の変遷と，時代を経ても変わらない「医学を学ぶ」中にある伝統，そして，京都大学に特徴的な医学教育について知っていただけるのではないか，と考えています。その上で，来館された方々に，現在の医学教育を見つめなおし，今後の医学教育がどのようなものであって欲しいか，どのようにしていきたいか，考えていただけることを期待しています。

第 1 章「京都帝国大学創立以前の京都における医学教育の姿」，「京都帝国大学医科大学の創立」では，江戸末期から明治にかけて欧米から流入した近代西洋医学とその教育の様子を，京都大学創立前の西洋医学教育について記した文書や，京都帝国大学医科大学創設時の史料を通じて，ご紹介します。それまでとは異なる新しい医学体系である近代西洋医学を当時の医学生や医師たちがどのような場で，どのように学んでいたのか，展示物を見ながら，ぜひ想像してみてください。この第 1 章の展示物の中には，以降の章にも続いて見られる医学教育の伝統の端緒を見出すことができるかと思います。どんな要素がこの後の医学教育へと引き継がれていったのか，という観点からこの第 1 章をみていただきたいと思います。

第 2 章「明治から昭和にかけての医学教育」では，京都大学医学部の過去の医学教材の中からムラージュ（図 1）と教育掛図（図 2）を展示しています。ムラージュとは患者さんの皮膚病変を型取りし，彩色を施した非常に精巧にできた模型のことで，写真技術がなかった時代に，医学生や医師が皮膚病変について学ぶ際に使われていました。教育掛図とは，講義内容を説明するために作成された大きな絵図のことで，「掛図」という名の示す通り，講義中，教室の壁に掛けられて使用されていました。これは，現在のパワーポイント®等を用いて作成した講義を映したスクリーンに相当する教材ともいえます。今回，展示している病理学の教育用に使用されていた教育掛図は，全て手描きのもので，医学生や医師が何を学ぶべきなのか，教員と描き手（おそらく絵師や教室員）が議論しながら協同で作りあげていったものなのではないか，と考えられています。その他，当時の病理学教室が熱心に研究し，日本国内での根絶に貢献した日本

図 1　ムラージュ「皮膚疣状結核」

図 2　病理学掛図「静脈血栓」

図 3　「現在の京都大学の医学教育」展示風景

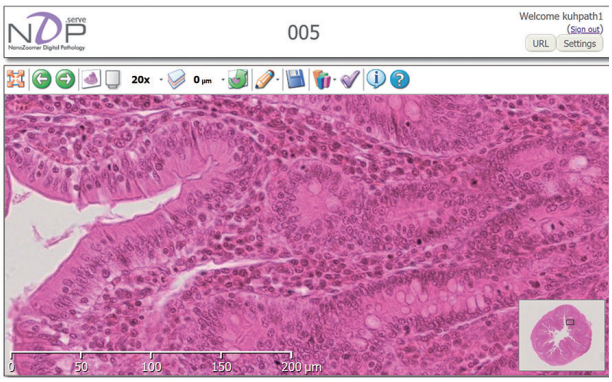


図４　バーチャルスライド

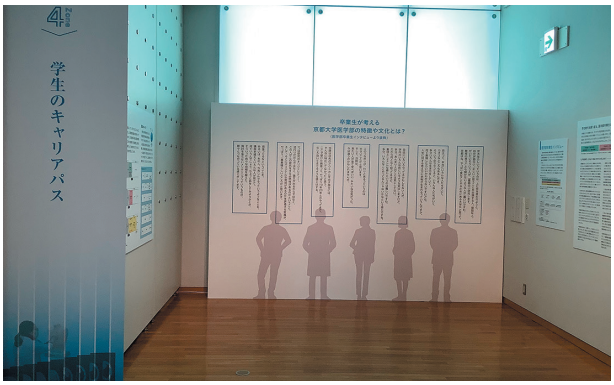


図５　「学生のキャリアパス」展示風景

住血吸虫症に関する研究史料と教材を展示し，当時の医学生たちが，既存の医学知識だけでなく，新たな知見を生み出す研究についても学んでいたことを紹介したいと思っています。

第３章「現在の京都大学の医学教育」（図３）は京都大学医学部医学科における現在の医学教育の様子についての展示となります。ここでは，京都大学医学部医学科の６年間のカリキュラムにできるだけ沿うような形で，教材（教科書，バーチャルスライド（図４），シミュレーター，CT 画像），教育プログラムの解説と，実際に医学生たちが学ぶ様子を写した動画を並べてみました。教養と医学の基礎部分を学ぶことにはじまり，臨床的な医学について学んだ後に，医療現場での診療に参加していく，という，医学生が医師になっていく上での学びの過程を追ってみていただけるようになっています。この過程の中で，京都大学の医学教育に特徴的な「研究マインドを持った人材の育成」がどのようになされているのか，教育プロ
グラムや学生たちの具体的な経験談を紹介したパネル，実験ノート他，この第３章の展示の随所から感じとっていただけるのではないか，と思います。

第４章「学生のキャリアパス」（図５）では，これまでの医学教育制度の時代的変遷と，医学生たちが卒後に歩む多様なキャリアパスについて紹介しています。この章の展示は，京都大学医学部医学科の卒業生の方々の多様なキャリアパスや，京都大学の医学教育に対する振り返りを反映させながら作成しました。この展示から「医師」である，ということが，臨床医学を実践し，教育を通じて医学を後進に引き継いでいくとともに，研究を通して医学自体を刷新し，医療現場と社会へと新しい知見を還元していくこと，と非常に広い意味を持っていることを知っていただければ，と思います。

エピローグでは，新型コロナウイルス感染症の影響を受けて，対面での臨床実習が十分にできない状況の中で起きている医学教育の変化と，今後の医学教育の方向性について，世界や日本の医学教育の動向を絡めながら紹介しています。近年，医学教育の国際標準化が謳われ，日本でも医学教育の質を保証するとともに継続して改善していくための取り組みが次々に始まっています。この中にあって，どのような医師を育成するのか，そのための医学教育はどうあるべきなのか，様々な議論がなされてきており，その成果とプロセスについて知っていただけるのではないかと思います。

会期中は,「医学の歴史」（日合弘　京都大学名誉教授）「これからの医学教育の方向性―医学教育に何が求められているのか」（小西靖彦　京都大学医学教育・国際化推進センター教授）「日韓における近代医学教育の歩み」（Kyu Won LEE　ソウル大学校医科大学医学科客員教授）の３回の講演会を予定しています。

新型コロナウイルス感染症流行の影響により，本展示は１年の延期を余儀なくされ，体験企画やギャラリートークなど対面でのイベントは縮小することになりました。しかし，展示自体は当初の予定と変わらない形で開始することができました。新型コロナウイルスの影響によって，医学教育の現場が大きく変化せざるを得ないような今，このような形で，過去から現在にかけての医学教育を振り返ってみることは，これからの医学教育を考えていく上では大きな意義があるのではないか，と思っています。来館された方々お一人お一人にとって，本展示が，どのような医師を育成するのか，そのための医学教育とはどうあるべきか，を考えるきっかけになりますよう，企画展実行委員会一同，願っています。

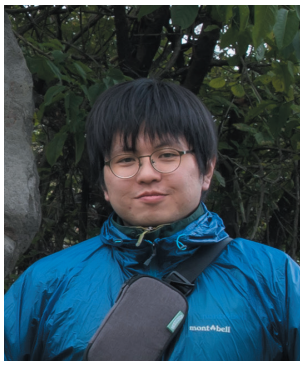
（医学研究科 医学教育・国際化推進センター
非常勤研究員　森下真理子）

新任スタッフの紹介

竹之内 惇志　研究部資料開発系・助教　　7 月 1 日着任

7 月より総合博物館の助教に着任いたしました，竹之内と申します。主に化石や鉱物といった，地球科学に関する標本を担当いたします。私は大別すると石の研究者になります。石の研究者というと，ヘルメットとハンマーを装備し，山や川で怪しい（？）動きをしている人を思い浮かべるかもしれません。しかし，私のメインの研究対象は山や川ではなかなか手に入らない，地球外から飛来する石である「隕石」です。特に，火星から来た隕石を用いて，天体から岩石を放出する「天体衝突現象」に関する研究をしています。

地球外物質というと，珍しくて遠い存在に感じる方も多いと思います。しかし，実は地球には毎年数千～数万トン（！）もの大量の地球外物質が降り注いでおり，決して遠い存在ではありません。その一部は流星や火球としても観測され，燃え残りが隕石となります。昨年の千葉県の火球＝習志野隕石は記憶に新しく，私も初期記載を分担しました。歴史資料にも古くは西暦 861 年から，火球の目撃・隕石の回収という記述が残されており，歴史的隕石の一つである岡野隕石（1904 年兵庫県の丹波篠山に落下）は，当時の記録とともに総合博物館に所蔵されています。



岡野隕石も含めた総合博物館所蔵の三高標本，農学部標本，比企標本は，日本の鉱物学の歴史を反映する唯一無二の標本であり，日本の宝です。私はそれらの標本を正しく管理・活用していきたいと思います。また，博物館が，楽しく，知的好奇心を刺激し，気軽に足を運べる身近な場所となるように，標本管理･研究･アウトリーチの三本柱で精一杯尽力したいと思います。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

齋藤 歩　研究部研究資源アーカイブ系・特定助教　　4 月 1 日着任

2021 年 3 月で 5 年間の任期が満了し，再び総合博物館の教員として京都大学研究資源アーカイブの事業を担当しています。

私の研究テーマは建築分野のアーカイブズ整理法です。この 5 年間では，建築に関するアーカイブズの実務を経験して，博士（アーカイブズ学）の学位取得にもつながりました。これからは研究資料全般に対象を広げて，教育研究の記録をアーカイブズとして永久保存するために，研究面では先行事例の分析，実務面では業務に役立つ考え方の体系化に挑戦したいと考えています。

この 5 年のあいだには国立公文書館の認証アーキビスト制度が整備されて，アーキビストへの期待と関心が高まってきました。その対象はおもに公文書が想定されていることから，高等教育機関で研究資料の保存に関わるアーキビストは特異な存在に映るかもしれません。しかしながら，総合博物館での試みは，アーカイブズ本来の広範な対象が再認識される契機となるはずです。アーカイブズの考え方が定着するまでの過渡期ともいえる現在の日本で，ここでの活動は未来のアーキビストが活躍する場を広げることにもなりえます。

学内で関心が高まる「研究データ管理 Research Data Management（RDM）」にも，アーキビストとして貢献できる可能性があります。RDM の第一の目的は研究の透明性確保ですが，アーカイブズの理念にしたがって記録の作成から最終的な公開までを地続きにとらえることで（アーカイブズ学で「レコードキーピング」と呼びます），研究のイノベーションも期待できます。その実現には，記録の作成段階からアーキビストが関与することが必要です。アーカイブズ学の可能性を開拓するために関わってみたいもうひとつのテーマです。

佐藤 真央　研究員

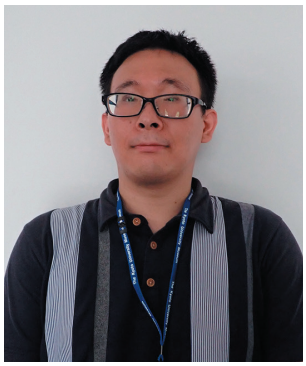
4月1日着任

4月より研究員として着任いたしました，佐藤と申します。京都大学には，計約40万個体の魚類標本が総合博物館と舞鶴水産実験所に分けられ収蔵されており，私は総合博物館の魚類標本コレクションの管理や利活用を担当しています。このコレクションには，学名を命名した際の基準となった標本や，図鑑や研究に用いられた証拠標本に加え，現在では採集調査が行われていない海域や水深帯から得られた標本も多く含まれており，コレクションの独自性は非常に高いといえます。標本を今後も劣化なく維持するために，そして様々な分野の研究者に活用していただくために，コレクションの管理に精一杯取り組んでゆきます。

私の専門は，魚類がもつ，水流を感受するための感覚器官（側線系）の比較形態学です。側線系は，体内を通る管構造や，体表や管構造中に生じる受容器から構成され，その発達程度は種やグループにより異なります。様々な魚種における観察の積み重ねにより，側線系の形態的多様性とその進化的意義の一端を明らかにできるのではと考え，研究に取り組んでいます。この側線系の研究も，総合博物館の収蔵標本の観察を通してさらに進展しつつあります。

坂川 幸祐　研究員

4月1日着任



4月より研究員として着任いたしました，坂川と申します。考古学資料の貸し出しや調査等への対応や，考古学資料に加えて日本史史料を含む文化史関係資料の収蔵環境の調査や調整を担当しています。専門は考古学，特に内蒙古やシベリアを含むユーラシア草原地帯の古代文化について研究を行っています。

私がフィールドとしている草原地帯では，歴史的に匈奴や突厥，ウイグル，モンゴルといった，遊牧民が主体となる強大な国家が興亡を繰り返してきました。このような遊牧民に対してともすれば野蛮なイメージを持たれるかもしれませんが，彼らはその移動性に富んだ生活スタイルのために，ユーラシアの東西の文化交流を媒介し，新しい文化の息吹をもたらす役割を，歴史的に担ってきました。東アジアの文化の展開にも，彼ら遊牧民は少なからぬ影響を与えて来たのです。

そのような古代の遊牧民が残した考古学遺物は，ここ総合博物館にも数多く所蔵されています。これらの遺物は，遊牧民たちが自分たちの手で書き残さなかった彼らの歴史を知る上で不可欠な資料になります。こういった資料に関する情報を広く世界に発信し，また後世に伝えてゆくために，精一杯取り組みたいと思います。

総合博物館長の再任

2021年4月～2023年3月の総合博物館長に永益英敏教授が再任されました。

2019年4月から総合博物館長を務めていますが，任期の2年はあっという間でした。この4月に再任され，2期目が始まったところです。1年目はICOM（国際博物館会議）京都大会もあり，慣れない館長職に四苦八苦しているうちに，コロナウイルス感染症の世界的な流行が始まりました。これにより総合博物館も大きな影響を受け，ほぼ6ヶ月にわたる臨時休館とその後の入館者数制限により，2020年度の入館者数は前年度の10分の1にまで落ち込みました。また，教育・研究のための収蔵資料の利用も大きく制限されてしまいました。そのような中ではありましたが，2年目には懸案だった外部評価を実施することができたことは大きな成果だと思っています。評価委員からいただいたさまざまな指摘，提言を参考に，大学博物館としてのさらなる発展を目指します。なかでも収蔵資料のデジタル発信には積極的に取り組んでいきたいと考えています。

（京都大学総合博物館長　永益英敏）

総合博物館コレクション研究〈12〉

水野清一寄贈綏遠・包頭購入青銅器について

はじめに

1935 年に江上波夫と水野清一が刊行した『内蒙古・長城地帯』，その中心的な論文である「綏遠青銅器」は，長城地帯の青銅器研究における金字塔であり，後の研究に大きな影響を与えた[*1]。この論考は両氏と三上次男が 1930 年 8 月に綏遠（帰化城，現在の内蒙古自治区フフホト市），包頭および五原方面への調査旅行の際，帰化城および包頭にて購入した資料に基づいており，その一部を現在総合博物館が所蔵している。「綏遠青銅器」報告資料は報告者らが現地にて出土遺跡に関する聞き取りを行いつつ購入しており，資料の数と信頼性に加え，出土地域をある程度絞り込むことができる点で，国内でも有数の資料である。本稿ではこれらの中から 2 点の青銅器を紹介し，その重要性について述べたい。

資料の概要

総合博物館考古資料登録番号 [3501] の資料は，「綏遠青銅器」で報告された青銅器の一部である。[3501] には綏遠（帰化城）購入資料と包頭購入資料が一括して登録されており，両都市からそう遠くない地域からもたらされたものである。「綏遠青銅器」によれば，両都市の古物商は豊鎮（内蒙古自治区ウランチャプ市南部）や榆林（陝西省北端）に人を派遣して青銅器の蒐集に努めていた，また五原では類似した青銅器をほとんど見なかったといい，ウランチャプ市を東限，陝西省北部を南限，包頭から五原までの地域を西端とする領域から出土したものだろうと考えられる。現在内蒙古中南部と呼ばれる地域にほぼ相当する。

今回紹介するのは，その中で『京都大学文学部博物館考古学資料目録』が青銅小飾金具 (246) と呼ぶ青銅器中の 2 点である。図 1-1 は長さ 3.6 cm, 幅 2.6 cm, 通高 1.1 cm，図 1-2 は残存長 3.3 cm，幅 2.7 cm，通高 1.0 cm で中心に低いドーム形の円形飾を持つ。図 1-2 は一部が破損しているが，2 点はともに円形飾の上下に鳥の頭の紋様を点対称に配置する。また図 1-1 は磨滅しているが，図 1-2 円形飾の中心には円形の沈線紋の痕跡を確認でき，図 1-1 にも本来伴っていた紋様であろう。図 1-1，図 1-2 ともに裏側の中心に縦方向に走る橋梁状のホック（鈕）がついており，その下には太い溝が走る。この中心を通る断面図上では，この鈕の部分と溝が一続きになり，円形の中空部を形成する。2 点はとてもよく似ている。坂川はこのような小飾金具を，紋様を点対称に配置し，対称の中心にも点対称の装飾をあしらう特徴に着目し，ロシア考古学の言葉を借用して「蝶形牌飾」[*2] と

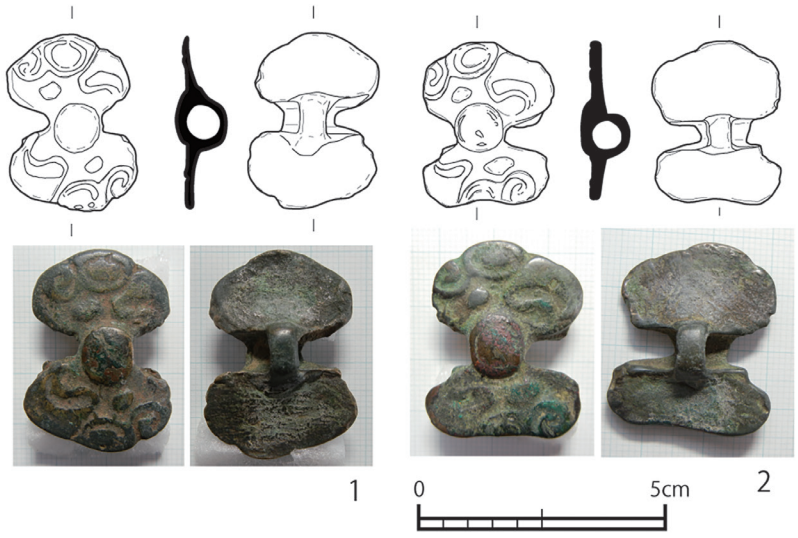


図1　京都大学総合博物館所蔵蝶形牌飾

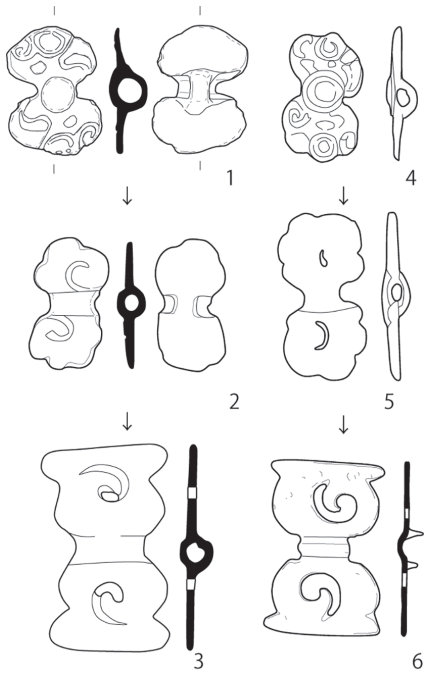


図2　内蒙古中南部（左）とアルタイ地方（右）の蝶形牌飾の変遷

呼んでいる。紀元前 6 世紀後半以降に盛行した装飾品である。

近年の調査で，これら蝶形牌飾は当時の遊牧民の腰帯を飾った帯飾であることがわかっている。本稿の 2 点に似た鳥頭紋様を伴う事例は，ウランチャプ市涼城県崞県窖子遺跡，同毛慶溝遺跡，同忻州窖子遺跡から出土しており，総合博物館の 2 点も涼城県周辺から出土したのだろう。この他に類例はロシア連邦アルタイ地方のフィルソフォ XIV 遺跡からも出土しており（図 2-1），内蒙古中南部とシベリアとの関係を示唆する＊3。これらの遺跡の年代から，総合博物館の事例は紀元前 6~5 世紀に位置付けられる。さらに輪郭の特徴を見るに，その中でも古いものだろう。

資料の意義

総合博物館所蔵の 2 点には，内蒙古中南部の出土品では確認できない特徴もある。上述した，中軸の断面図に円形の中空部ができるという特徴である。発掘で出土した内蒙古中南部の鳥頭紋様の蝶形牌飾は，断面コ字状の鈕が取り付けられ，断面に円形の中空部は形成されない。鈕の断面形態は鋳型の構造と関係し，総合博物館の事例が特殊な鋳造技法で製作されたことを示す。

鈕の下の溝状の痕跡は，紀元前 5 世紀以降に広く確認できる，三葉形の輪郭と単純な曲線紋様，棒状の中心飾を持つ蝶形牌飾に多くみられる（図 2-2, 2-4）。これの変容形と思われる蝶形牌飾は内蒙古中南部，アルタイ地方ともに紀元前 4 世紀までは確認することができる（図 2-3, 2-6）。

坂川は三葉形の蝶形牌飾は，鳥頭の蝶形牌飾から派生したと考える。国立ウランバートル大学のオルギルバヤルがモンゴル国フヴスグル県で発掘した蝶形牌飾（図 3）は，総合博物館例から三葉形の蝶形牌飾への変遷過程を示唆する＊4。この変遷仮説が正しければ，少なくとも紀元前 5 世紀から紀元前 4 世紀までの間，内蒙古中南部とアルタイ地方では共通する型式の蝶形牌飾が製作され続けたことになり，直線距離で約 2500 km 離れた両地域間の恒常的な往来を示唆する。遊牧民は遠隔地間の文化交流を媒介してきたことが指摘されているが，今回紹介した総合博物館の蝶形牌飾は，その背景にあった遊牧民同士の活発な交流の具体像を提示しうるのである＊5。

図 3　モンゴル国フヴスグル県出土蝶形牌飾

おわりに

この仮説は今後更に検討する必要があるが，「綏遠青銅器」が報告する資料が紀元前 1 千年紀の遊牧民の社会の実態を探る上で極めて重要な資料であることは確かだ。これらの資料は 1935 年の報告以降，断片的に貸し出しはされてきたものの，最新の研究水準にあわせた再調査はほとんど行われてこなかった。特に今回紹介した蝶形牌飾は，原報告でも表の写真が提示されるのみで，実測図や背面や断面の写真が掲載されていない。同様に必要な情報が欠けた資料は，総合博物館所蔵の長城地帯出土資料に数多く残されている。今後これらの資料の再調査を進め，当館の貴重な資料に関する情報発信を進めていく必要があろう。

（総合博物館 研究員　坂川幸祐
国立ウランバートル大学 講師　S. オルギルバヤル
国立ウランバートル大学 准教授　T. イデルハンガイ）

《図版出典》　図1-1, 1-2, 図2-1：坂川作成, 図2-2：内蒙古自治区文物考古研究所, 内蒙古自治区文物保護中心編著 (2016)『岱海地区東周墓群発掘調査報告』科学出版社, 図2-3：内蒙古文物工作隊 (1986)「毛慶溝墓地」『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社, 図2-4, 2-5：Фролов, Я. В. (2008) Погребальный обряд населения Барнаульского Приобья в VI в. до н. э. - II в. н. э. (по данным грунтовых могильников): Абзука, 図2-6：Завитухина, М. П (1961) Могильник времени ранних кочевников близ г. Бийска // Археологический сборник государственного Эрмитажа, Вып. 3, Изд. государственного Эрмитажа, 図3：イデルハンガイ写真撮影

＊1――江上波夫・水野清一 (1935)「綏遠青銅器」『内蒙古・長城地帯』東亜考古学会

＊2――ただしこの用語には，実際に蝶を象っているわけではないから不相応であると批判も受けている。（松本圭太 (2020)「前1千年紀中葉における初期遊牧民文化の変容」『考古学雑誌』第103巻第1号）

＊3――フィルソフォXIV遺跡の装飾品は，中心飾が半球状にふくらみ円形の沈線紋も明瞭になる，鳥頭紋様に内蒙古の事例には見られない蝋膜の表現が見られるといった違いもある。

＊4――この資料はオルギルバヤルが発掘し，イデルハンガイが坂川に写真を提供した未報告資料である。ここでは両氏に許可を得たうえで写真を掲載し，また文責を共有している。

＊5――坂川幸祐 (2016)「蝶形牌飾の展開」『中国考古学』第十七号

研究資源アーカイブ通信〈22〉

アーカイブズと私（3）：髙井たかね先生に聞く

「田中淡建築庭園写真，1970–2003」

京都大学研究資源アーカイブは，2021 年 8 月に「田中淡建築庭園写真，1970–2003」を公開しました。学生時代，文化庁文部技官時代，京大人文科学研究所時代の三つの時期に作成された調査研究の活動記録について，人文科学研究所の髙井たかね先生に背景や見どころを伺いました。

（聞き手：総合博物館 特定助教　齋藤 歩）

資料との出会い

――田中淡先生（中国建築・庭園史）の資料の存在を知ったのはいつですか。

髙井　たしか，私が大学院博士課程 1 年目の頃（1999 年）です。当時，田中先生は人文科学研究所所属だったのですが，私のいた人間・環境学研究科で授業を担当されていました。その頃は，まだ田中先生の研究室には出入りしていなかったのですが，中国へ留学するための紹介状を書いてもらうことになり，初めて研究室に入りました。部屋に入るとすぐキャビネットが置いてあって，その中に緑のスライドボックスがずらりと並んでいました。

――田中先生は退職のときにスライドを処分するつもりだったそうですね。

髙井　はい。2010 年に退職されていますが，その前から体調を崩されていたこともあって，なかなか部屋が片付きませんでした。5 月の連休くらいまでかかったと思います。片付けの途中で，写真アルバムなどの資料が研究室前の廊下に置かれているのを見つけたんです。驚いて先生に尋ねたら，スライドも含めて捨てると言うんですよ。それはもったいないと，お預かりすることになりました。

――田中先生は 2012 年に亡くなられていますが，退職後に資料の内容について話すことはあったのですか。

髙井　田中先生が共同研究班で読み進めていた本の訳注を『東方学報』第 86 冊（2011 年 8 月発行）[*1] に掲載することなり，その原稿づくりをすることになりました。そのときに，先生の写真資料から図版に利用できるものがあれば使いたいというやりとりをしました。写真資料の中身を全体的に見たのは，そのときが初めてだったと思います。

資料解説 1：下華厳寺薄伽教蔵殿（しもけごんじばぎやきょうぞうでん）

髙井　田中先生は，1975 年に第一次古代建築友好訪華団の一員として訪中して以来，何度も中国を訪れ，多くの建築を見てまわっています。そのうち山西省大同にある下華厳寺は中国古建築の遺構としては重要なもののひとつで，何度か訪れています。残された写真からは，1975 年，1981 年，1992 年と，三つの時期を定点観測的に比較することができます［写真］。

下華厳寺の経年変化については，「ハゲの価値を見直そう」[*2] という随筆に詳しく書かれていますので，少し読んでみます。

「遼代の遺構である大同下華厳寺薄迦教蔵殿は，内部に遼代の塑像を安置し，その上に藻井（ドーム型化粧天井）を構成する貴重な実例であって，当初の古い彩色文様が遺っていることでも知られる。さすがに殿内の彩色は塑像とともにそのまま保存されているが，七五年，七七年当時に映した外観の彩色は剥げたままで，丹念に調査すれば当初の文様彩色の復元も可能だったはずなのに，八一年撮影の写真にはもはや無惨にも無味乾燥な代赭色一色に塗り替えられた情況が映っている。ことほどさように，調査年月が後になればなるほど，金ピカピカ古建築が増えている」

タイトルにある「ハゲ」というのは「剥げ」のことです。文中に「八一年撮影の写真」では塗り替えられているとありますが，1981 年の写真を見ると，ちょっと黒ずんできていますが彩色は残っているようなので，これはおそらく 1992 年のことだと思います。1975 年の写真では，全体的に古びた感じがわかります。よく見ていただくと，

写真：下華厳寺薄伽教蔵殿　左：1975 年撮影（117_下華厳寺薄伽教蔵 正面 , IRHu PIC 2018/2/S1/002/0118）　中：1981 年撮影（34-11_ 大同下華厳寺 薄伽教蔵殿 _81, IRHu PIC 2018/2/S1/013/0168）　右：1992 年撮影（793_下華厳寺薄伽教蔵殿 , IRHu PIC 2018/2/S1/063/0173）

「古刹重新」と書かれた扁額（へんがく）の下あたりに彩色や文様が描かれているのが見えます。

――残された写真から，田中先生がどんなところに注目していたかがわかりますね。

髙井　田中先生が中国に行き始めた 70 年代には，中国建築を実際に見ている日本の建築史家は少なかったはずです。戦後日本の建築史家が中国古建築について残した写真記録，しかもカラーでという意味では，最も古い部類に入ります。その後何年か経ってしまうと「金ピカピカ古建築が増えて」しまうので，記録されてから半世紀足らずとはいえ，高い資料的価値があります。

資料解説 2：貴州トン族調査

髙井　少数民族である貴州のトン族の住居平面図（1990 年）も残されています。同じ場所を定点観測していると，その都度なにかしらの変化が見られますが，重要な建造物自体はわりと残ります。ですが，こういった住居の中の物の配置などは，いつでも消えるもので，通常は記録に残るものではありません。

――図面から生活が感じられますね。

髙井　30 年前の中国の，ある居住文化の限られた側面ではありますが，それでも，どこにどういう物が置いてあるかということが詳細にわかるのです。私も中国に留学していたときには調査をおこないましたが，古い家具などの物自体が残っているケースは限られていますし，その当初の配置となると，まったくわからないんですね。配置し直されていたり，後から持ってきた家具が入っている場合がほとんどなんです。ですから，家具を含めた生活財の配置までが描かれているのは，とても貴重な資料に思えます。

田中先生は建築史家で，もちろん建築の研究を主軸としてこられたわけですが，じつは，飲食史や，狩猟の論文も残しています。中国文化に対してかなり幅広い関心をもっておられました。建築単体ではなく，そういった居住文化の総体をとらえようという意識があったのだと思います。

――退職のときに写真は捨てようとしていましたが，ノートは残していたのですよね。もっと研究しようと思っておられたのでしょうか。

髙井　蔵書もかなり処分されていますね。建築全集のような大部の本も古書店に売ってしまわれました。退職してからやろうと思っていたテーマに関わるものだけを，取りあえず残したとおっしゃっていました。ですが，退職した年の秋に病気が発覚してしまったので，やりたかったことは，ほとんどできなかったと思います。残されたテーマのうちの幾つかは，こういった資料のなかにあるのだろうなと思います。

髙井たかね先生　撮影：岩倉正司（情報環境機構）

アーカイブズへの期待

――今後，この資料がどのように受け止められ，使われていくと思われますか。

髙井　実物の失われた古い時代の建築の研究では，発掘された遺構とともに，文献史料に頼らざるをえない部分がかなりあります。田中先生も，漢文史料を読み込んで研究する研究者というイメージが強いと思うのです。ただ，この資料を見ていると，その根っこにある気づきや問題意識のようなものは，中国に行って実際に見てきたもののなかから得ているのではないかと感じられました。そういった経験の重なりが，田中淡の学問を形づくっていったと思うのです。

田中先生は，中国はもちろんですが，日本の古建築もかなり見ていました。また，民家や村落なども見ていたようです。どうやらすべての写真が保存されているわけではないようなのですが，今回資料を見直して，若いときからさまざまなところへ行って，いろんなものを見ておられたのだなと，あらためて感じました。

抜けている部分があるにしても，今回データベース化されることによって，体系的に整理されたものを見ることができるようになりました。今後は，建築史などの研究者たちが，ここから何かを読み取ったり，問題を見出したりできるような，そういう写真の集合体として活用されることを期待しています。

［2021 年 6 月 14 日，人文科学研究所附属
東アジア人文情報学研究センターにて］

（人文科学研究所 助教　髙井たかね）

＊1――「方以智『通雅』巻三十八宮室：訳注（一）」，
URL: https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/147947
＊2――田中淡「ハゲの価値を見直そう」（『人文』第 57 号，京都大学人文科学研究所，2010，pp.1-5）
URL: https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/159002
＊3――資料の写真は，以下を参照しました。
「田中淡建築庭園写真, 1970–2003」, URL: https://u.kyoto-u.jp/kurra-tanaka
＊4――インタビューの全文は，後日，京都大学研究資源アーカイブのウェブサイトにて完全版として公開予定です。
URL: http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/

特別展「文化財発掘 VII」オンライン講演会

2021 年 5 月 8 日（土）・15 日（土）

特別展「文化財発掘Ⅶ」の関連講演会（第 1 回：5 月 8 日・第 2 回：15 日）は，コロナ禍への対処として定員30名事前申し込みとし，準備を進めてきた。しかし，緊急事態宣言発出による自治体からの要請で 4 月 25 日より臨時休館となり，対面では実施が不可能となった。昨年度同様に中止という選択もあったが，今回はオンライン形式での実施という判断をした。ここに，その経緯と所見を記しておきたい。

さて，総合博物館で初のこうした選択をした背景には，展示を共催する文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センターが，Zoom ウェビナーという Web システムのライセンスを導入し，活用を始めていたことがある。このシステムは，通常の Zoom ミーティングと違い，一般視聴者は基本的にマイク・カメラを使用せず，互いを認識できない。主催者や講演者が一方向的に視聴者に話すのが基本ではあるが，Q & A の書き込みや応答の設定は備えられ，会議ではなく講演やセミナーに特化した仕様といえる。今回が初めてとなる私たちは，事前に 3 回の試行をして不明点や不具合の対策を練った。具体的には，ホストのパソコンが予期せぬ更新で操作不能に陥ることがあり，バックアップに複数の共同ホストを設置する重要性を認識したほか，一般視聴者の表示画面との相違を把握しながら，チャットや Q & A の設定を吟味していった。

オンラインにて実施との判断をした時点で，第 1 回講演会はすでに申し込み締切が済み，第 2 回も締切目前に迫る段階であった。総合博物館への申し込みはメールあるいは往復ハガキとしていたが，ウェビナーは，まず参加登録ページへのリンクが記された招待メールを送信し，登録ページに氏名とメールアドレスを記入して返すと，折り返し講演視聴のためのアドレス情報等が自動応答される，という仕様になっている。そのためハガキで申し込みをしていても，視聴希望の場合はあらため

博物館講演室でのオンライン講演会の様子

Zoom ウェビナー参加者の視聴画面

てメールでのやりとりが必要になる。これ以外にも，登録から視聴に至る局面で，参加希望者から何らかの SOS がくることを予測して，作業マニュアルを作成し，事務室では想定問答とともに連絡に備えた。

結果として，心配はほぼ杞憂に終わり，当日も大きなトラブルなく講演会を終了することができた。感染症への予防対策を施した講演室にホストのパソコンを設置し，1 回目は講演室から，2 回目はリモートで，それぞれ 2 名による講演をおこない，展示を画像で示した簡単な解説も加えたほか，終了後にはアンケートを実施した。ウェビナーには，事前のリマインドや事後のアンケートを自動送信する設定もあり，リマインドには講演資料を置くストレージのアドレスとダウンロードを求める文言を付加しておいた。

以上，円滑な終了に安堵しつつも，参加を希望していた方の全員に機会を提供できたわけでないことには一抹の悔いも残っている。アンケートはおおむね好意的で，オンラインでも講演が開催されたことに感謝が綴られているのはうれしい。しかし，そもそもこの形式に対応された方からのみの感想，と受け止めている。当初申し込みされた 30 名のうち，オンラインで参加登録された方は 6 割前後であり，来館して対面参加してこそ，という根強い需要も感じられる。（なお当初にハガキかメールで申し込みをして，ウェビナーへの参加には登録されなかった方には，総合博物館から紙または URL 送付にて講演資料を配付している。）オンライン形式のメリットはあえて取り上げるまでもないが，今後にさまざまな目配りの必要性を教えてくれる貴重な経験を得たことを，感謝したい。

（文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター
助教　伊藤淳史
総合博物館 准教授　村上由美子）

「レクチャーシリーズ」再開

2021 年 6 月 12 日（土）

レクチャーシリーズは，中学生以上を対象に総合博物館が開催している京都大学の研究者による講演会です。1 階ミューズラボで年 4 回開催しています。ミューズラボは自然史常設展示室内に設置された定員 30 名の円形ホールで，来館者が気軽に立ち寄ることができ，また，演者と参加者の距離が近く，参加者が演者に対し質問をしやすい雰囲気があるのが特徴です。

2002 年 7 月 6 日にレクチャーシリーズを開始し第 154 回（2019 年 9 月 14 日）まで定期的に開催していました。しかし，2019 年 10 月 12 日の台風 19 号接近に伴う臨時休館，新型コロナウイルス感染症の流行による臨時休館や対面形式のイベント開催自粛で 1 年以上「レクチャーシリーズ」を休止していましたが，2021 年 6 月 12 日に第 155 回レクチャーシリーズをオンライン形式で再開しました。

第 155 回は，2020 年にイグノーベル賞（音響賞）を共同受賞された西村剛准教授（霊長類研究所）に「ヘリウムを吸ったサルとワニ」といタイトルでご講演いただきました。西村准教授は第 94 回（2011 年 10 月 15 日）にも「サルの声とヒトの話しことば」というタイトルでご登壇いただきました。

第 155 回では，テナガザルなどの鳴き声を研究されている西村准教授がワニの音声を研究するに至った経緯や目に見えない「音声」の仕組みについて丁寧な解説と西村准教授が自らヘリウムガスを吸って声が変わる実演を交えながら，生物の声の進化について紹介していただきました。終了後に参加者からは「ヘリウムガスは何からできていますか？」「ヘリウムガス以外にも声が変わるガスはありますか？」など活発に質問があり，レクチャーシリーズを無事に再開することができました。

西村准教授の Zoom でのレクチャーの様子

（総合博物館 研究員　中川千種）

西村准教授のイグノーベル賞（音響学）の共同受賞
http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/pub/press/20200918/index-j.html

大学博物館等協議会・日本博物科学会

2021 年 6 月 24 日（木）・25 日（金）

大学博物館等協議会 2021 年度大会と第 16 回日本博物科学会が 6 月 24 日（木）と 25 日（金）にオンラインで開催されました。これらは全国の大学博物館関係者が毎年集う大会ですが，昨年は新型コロナウイルスの影響で中止となり，1 年ぶりの開催となりました。京都大学総合博物館からは 10 名が参加しました。大学博物館は学芸員養成課程に大きな役割を果たしています。今回の協議会ではシンポジウム「コロナ禍における大学博物館と学芸員養成」が行われ，3 つの大学博物館での取り組みを共有することができました。大人数や対面での実習が困難な中でオンラインも活用しながらの学芸員養成課程への取り組みについて議論する機会となりました．また，研究や活動発表の場である日本博物科学会では 12 演題の口頭発表が行われました。新型コロナウイルスによる休館の中で，これまでと異なる新しい取り組みの紹介が多く発表されました。総合博物館からは「コロナ禍における小中学生向け体験型プログラム「子ども学習教室」の実施」，「コロナ禍におけるオンライン展示配信とアバター型展示鑑賞の試み」，「研究者資料の整理法—実験物理学者・中谷宇吉郎資料を事例としたアーカイブズ学的実践と研究」，「京都大学デジタルアーカイブシステム Peek の更新：Kaltura 連携・IIIF・ARK・典拠データ」の 4 つの発表を行い，参加者との議論や意見交換を深めることができました。

（総合博物館 教授　本川雅治）

総合博物館日誌（2021 年 3 月～ 6 月）

展示

・2020 年度特別展　文化財発掘 VII「木を遺（のこ）す、木を伝える―木製品の調査と保存―」
2021 年 3 月 17 日（水）～ 5 月 16 日（日）
＊好評につき 6 月 27 日（日）まで会期を延長
＊ 4 月 25 日～ 5 月 11 日は臨時休館

ロビー展示

・2020 年度特別展関連展示 「木を遺（のこ）す、木を伝える―北白川追分町遺跡出土材と学際研究―」
2021 年 3 月 17 日（水）～ 5 月 16 日（日）
＊好評につき 6 月 27 日（日）まで会期を延長
＊ 4 月 25 日～ 5 月 11 日は臨時休館

京都大学総合博物館×京都府立図書館 連携展示

「北白川、岡崎遺跡の発掘調査」, 京都府立図書館ナレッジスペース，2021 年 3 月 26 日～ 4 月 21 日

イベント

該当なし

レクチャーシリーズ

・第 155 回　ヘリウムを吸ったサルとワニ
西村 剛（京都大学霊長類研究所）
2021 年 6 月 12 日（土）　Zoom によるオンライン開催

博物館セミナー

・第 110 回　その名は，伊勢貞昌
木土博成（京都大学大学院文学研究科）
2021 年 3 月 12 日（金）　Zoom によるオンライン開催

・第 111 回　魚採りから始める感覚器官の形態研究
佐藤真央（京都大学総合博物館）
2021 年 5 月 14 日（金）　Zoom によるオンライン開催

・第 112 回 腰帯から見る古代遊牧民の交流とその社会
坂川幸祐（京都大学総合博物館）
2021 年 6 月 11 日（金）　Zoom によるオンライン開催

その他

該当なし

展示協力（学術標本資料の貸出）

・堺市博物館（4 点）特別展「海を越えたつながり―倭の五王と東アジア―」
2021 年 3 月 13 日（土）～ 5 月 9 日（日）
＊緊急事態宣言による休館のため 4 月 24 日（土）で閉幕

・長崎歴史文化博物館（3 点）企画展「長崎開港 450 周年記念展―ふたつの開港―」
2021 年 4 月 24 日（土）～ 6 月 6 日（日）

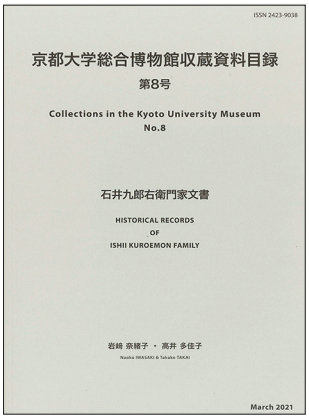
・三重県総合博物館（26 点）第 28 回企画展「やっぱり石が好き！三重の岩石鉱物」
2021 年 4 月 24 日（土）～ 8 月 29 日（日）

入館者数

1,773 名（うち特別観覧　2 団体，22 名）
＊ 2021 年 4 月 25 日～ 5 月 11 日は新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言をふまえた京都府における緊急事態措置により臨時休館

博物館の刊行物

京都大学総合博物館収蔵資料目録第 8 号
「石井九郎右衛門家文書」（2021 年 3 月 30 日出版）



入館のご予約についてのお知らせ
2021 年 8 月現在，入館は事前予約制により受付けております。
ご来館の折には，当館ホームページにて最新の状況をご確認ください。
子ども博物館は 6 月 26 日より再開し，毎週土曜日に実施しています。

発行日　2021 年 8 月 25 日
編集・発行　京都大学総合博物館　電話　075-753-3272
〒 606-8501　京都市左京区吉田本町　FAX　075-753-3277
http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/